

Stuttering is OK because what I say is worth repeating.

—どもってもいい。なぜなら私が言うことには、繰り返す価値があるから—

遠藤 優



私は、小学5年生の頃に側音化構音が、中学1年生の頃に吃音が顕在化しました。当時は、側音化構音での苦勞が多く、吃音は軽いものでした。2つが別の障害であり、ことばの教室のように支援を受けられる場があるとは知らず、側音化構音を原因としたいじめを受け続けました。先生が指導してくれたとしても、「チクった」とさらにエスカレート。死にたくなることもありました。通常学級の先生には、構音障害や吃音をもっと知ってほしいです。

「勉強していい学校に行けば、楽しい学校生活を送ることができる」その一心で勉強に励み、第一志望の高校に合格。個性を尊重してくれる高校でしたので、過ごしやすい環境でした。しかし、大学進学に向けた浪人生活中から、吃音が急激に悪化しました。自由に話せていた頃とのギャップに苦しみ、吃音を隠そうと努力しました。大学では人と話す機会を避けたいがために欠席することが増えて、勉強も手に付かなくなりました。

転機は、大学2年生の8月。トルコ旅行で有意義な経験を積んだ私は、「普段の私は何をやっていたのだろう？逃げてばかりの生活は、無駄な時間を過ごすだけだ」と感じるようになりました。自分の吃音にもっと向き合いたいと考え、同大学の医学部健康総合科学科に進学。吃音者の集まりである「東京言友会」「小中高校生の吃音のつどい」にも参加するようになりました。卒業論文では吃音に関する研究をし、2016年の吃音流暢性学会で発表しました。吃音世界大会にも、2016年と今年2018年に参加。吃音があるという共通項で世界の人とつながれたことはとても嬉しく、言語が違っても、吃音の出方は同じなのだ、実感しました。将来は自分の経験を活かしながらも、専門的な視点で吃音とかかわっていきたいと考えるようになり、他大学の医学部に進むことにしました。

吃音者の集まりに参加するようになってから、カミングアウトにも挑むようになりました。初のカミングアウトは2013年、学科の自己紹介冊子に「名前がスムーズに言えなくても、不快に思わないください」と掲載。一部の人に理解してもらっただけで、だいぶ楽になりました。2016年には、Facebookでカミングアウト。昔の友達も含めて、誰に対しても伝えられるようになりました。現在、大学の友達には、グループLINEの自己紹介でカミングアウトしています。このような形が自分には一番負担が少なく、効果的でした。カミングアウトは、リスクを減らす手段として有効であると思います。

「小中高校生の吃音のつどい」では、現在もスタッフを続けています。どもるのは自分だけではないと思える場で、遠慮なくどもりながら、同年代の吃音のある友達を作れること、年上の人たちから吃音との付き合い方を教わるができることが、つどいの意義であると思います。

吃音は一生つきあっていかななくてはいけないので、どもりながらであっても、言いたいことを伝えることが重要です。これからの子どもたちには、「どもってもいいよ」「どもりながらでも、生きていけるよ」「つらいことがあったら、悩んでもいいよ」「自分ひとりで抱え込まず、相談しよう」と伝えたいです。